

地学基礎，地学

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

地 学 基 礎

1 前 文

「地学基礎」は、地球環境の変化，日本の自然環境とその恩恵や災害など，日常生活や社会との関連を図りながら，地球や地球を取り巻く環境に関心をもたせ，科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する科目である。

今回が実施2度目となる，令和4年度共通テスト本試験の受験者数は487,469人で，昨年度の共通テスト(1)に比べ4,387人増加した。今回の「地学基礎」受験者数は43,943人であり，昨年度より377人減少し，理科①全受験者数の15.2%であった。また，平均点は35.47点（50点満点）であり，昨年度より1.95点上昇した。

評価に当たっては，共通テストの趣旨である，「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し，大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし，各教科・科目の特質に応じ，知識・技能のみならず，思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする。」に基づき，本年度の「地学基礎」本試験の試験問題について，14ページに記載の8つの観点により，総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

出題内容や出題範囲については，ほぼ教科書に準じた内容から構成されており，学習指導要領に示された範囲からおおむね出題されていたが，いくつか「地学基礎」の範囲外の設問が見られた。詳細に見ると，「固体地球」，「地史・地質」，「岩石・鉱物」の各分野がそれぞれ2問で，「大気・海洋」，「天文」，「環境・災害」の分野が3問となっており，バランスの取れた構成になっている。設問によっては，教科書によって取扱いに差が見られる題材もあるが，特定の教科書への偏りはなかった。

内容については，思考力・判断力・表現力等を要する問題が見られ，共通テスト問題作成方針にのっとったものであった。その他に，基礎的な知識を問う問題，計算問題など様々な問題が見られた。図やグラフを用いた出題については，受験者にとって見慣れないものもあり，それらは思考力・判断力・表現力等を必要とする良問となっている。

以下，個々の設問について意見を述べる。

第1問B問4は，地層から産出する可能性のある化石についての知識を問う設問である。クックソニアが最初の陸上植物であるということを知っていれば正答を選ぶことはできるが，メタセコイアを新生代の示準化石として記載している教科書は2社のみのため，正答に至らなかった受験者もいたと思われる。

第1問C問5は，有色鉱物の特徴とマントル上部を構成する岩石についての知識を問う設問である。かんらん岩は教科書によって扱いに差があり，造岩鉱物に関する記載はどの教科書にもない。よって，イは「地学基礎」の範囲外であると考えられる。

第1問C問6は，火成岩の特徴についての知識を問う設問である。ベン図を用いているところが目新しい。思考を必要とする良問である。

第2問A問1は、梅雨期に形成される高気圧についての知識を問う設問である。気団の性質は主に中学校で学ぶ内容であり、教科書には記載があるものの、学習指導要領では範囲外になるため、高等学校の授業での扱いは軽く、記憶が薄れてしまっている受験者もいたと思われる。

第2問A問2は、地上天気図からおおよその風向きを読み取る設問である。風の吹き方は「地学基礎」の範囲外であるため、困惑した受験者が多かったと思われる。

第2問B問3は、図やグラフを基に、津波が伝わるのに要する時間を推定する設問である。見慣れない図とグラフに加えてリード文を適切に解釈する必要があり、思考を必要とする良問である。

第3問A問1は、太陽の主成分とその起源についての知識を問う設問である。「地学基礎」の教科書では、水素原子の起源について「ビッグバンのときにできた」はなく、「宇宙の晴れ上がり」でできたと記載されており、困惑した受験者がいたのではないかと思われる。

第3問A問2は、図を基に、黒点の大きさと太陽の自転周期についての知識・理解を問う設問である。この設問は知識と思考の有無で難易度が大きく変わる良問である。地球と黒点の大きさの比較については、読図だけでなく、太陽地球の約100倍の大きさであるという知識が必要とされる。しかし、選択肢が0.05倍と5倍の二択のため地球よりも大きいか小さいかが分かれば計算はしなくてもよいため、選択肢に工夫があると良い。太陽の自転周期については、数値を記憶している場合は選択肢を選ぶだけで済むが、記憶していない場合は太陽の見かけの自転周期を比較計算で求められ、難易度が上がるとと思われる。

3 分量・程度

大問4問構成で、小問数は15で構成されており、昨年度に比較して大問数は一つ増加したものの小問数は15と変更はなかった。

全体としての分量は、妥当な量である。したがって、多くの受験者は、時間内に解答することは可能であったと思われる。

各設問の配点については3点又は4点で、適切であった。

選択肢数は4択が14問、6択が1問である。6択は昨年の2問から1問減少し、これも適切であった。

また、観察、実験に関する設問が、昨年の4題から2問に減少し、その分知識問題が増加した。科学的な思考力・判断力・表現力等を育成することは地学教育においても不可欠であるため、観察・実験に関する設問は今後も出題を続けていただきたい。

難易度についてはA（平易）が6問、B（標準）が6問、C（やや難）が2問、D（難問）が0問と分析した。基本的な知識を問う設問だけではなく、知識を基に思考力・判断力・表現力等を必要とする問題も出題されたが、設問としては易しいものであったため、昨年度より全体としてやや易化した。難易度はAとBで全体の8割を占めるような問題作成をすれば、他科目とのバランスがとれるのではないかと思われる。

以下、気になった設問について述べる。

第1問B問4は、地層から産出する可能性のある化石についての知識を問う設問である。メタセコイアが選択肢にあったため、難易度が上がったと思われる。

第1問C問5は、有色鉱物の特徴とマントル上部を構成する岩石についての知識を問う設問である。かんらん岩は教科書によって扱いに差があり、造岩鉱物に関する記載はどの教科書にもない。よって、正解を選ぶのは難しかったと思われる。

第2問A問1は、梅雨期に形成される高気圧について、基本的な知識を問う設問である。気団の

性質は主に中学校で学ぶ内容になるため，記憶が薄れている受験者もいると思われる。
第2問A問2は，地上天気図からおおよその風向きを読み取る設問である。風の吹き方は「地学基礎」の範囲外であるため，困惑した受験者が多かったと思われる。

4 表現・形式

全体として，受験者にも分かりやすい表現が用いられており，理解しやすいものであった。
特に表現の仕方として指摘しておきたいものを次に挙げる。

第1問C問6は，組織と造岩鉱物に関する知識をベン図に落とし込む思考を必要とするが，花こう岩と流紋岩の特徴を理解していれば解答できてしまう。ベン図を用いたことは目新しく面白い。図に入れる内容を工夫すれば更に良い問題になったと思われる。

第2問B問3は，見慣れない図とグラフが出題されているが，リード文をよく読み，グラフに示された破線を頼りに数値を読み取れば容易に答えられる。グラフ中の破線はなくてもよかったのではないか。

形式については，項目判断：該当する項目を選択する設問，文章判断：該当する文章を選択する設問，計算：計算が主体となる設問の3項目に分類した。項目判断は9問であり昨年度と同様であった。文章判断は5問であり，昨年度より1問増加した。計算問題は1問であり，昨年より1問減少した。

5 ま と め（総括的な評価）

・高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは，「地学基礎」の教科書におおむね準じた内容から基本事項の知識・理解の習得だけでなく，観察，実験に基づき，文章や図，グラフから情報を読み取り，地学的な思考力・判断力・表現力等を見る問題が出題された。高等学校では，基本事項の知識・理解とともに，探究活動による観察，実験を行い，基本的な原理・法則を理解させる必要がある。さらに，実験の手法の習得や仮設の設定，実験の記録・資料から考察する力などを身に付けさせることも必要である。また，学習した内容について，日常生活や社会との関わりを示しながら，自然災害や地球環境の諸問題と関連をしていることを考えさせる授業が求められる。

・意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を，以下の8項目の視点から次のように要約し，今後の試験問題の作成に対し，提案・要望を行う。

- (1) 学習指導要領に示された範囲からおおむね出題されていたが，いくつか「地学基礎」の範囲外の設問が見られた。
- (2) 高等学校における学習の達成の程度を見るにふさわしい問題内容であった。
- (3) 教科書に基づく基礎的な知識・理解を重視しつつ，地学的な思考力・判断力・表現力等を問う出題もされていた。
- (4) 出題内容は各分野から満遍なく出題されていた。
- (5) 問題の難易度の程度，設問数，文字数，選択肢数はおおむね適切であった。
- (6) 観察，実験に基づく問題の場面設定がなされた問題が含まれており適切であった。
- (7) 設問の形式や文章表現・用語，そして配点は適切であった。
- (8) 図やグラフを効果的に用いた出題があり適切であった。

問題作成においては、学習指導要領の「地学基礎」の内容、範囲内からの出題をお願いしたい。今回、「岩石・鉱物」と「大気と海洋」の分野で、学習指導要領の範囲外からの出題があったが、範囲外の出題があると「何をどこまで教えるのか」が定まらず、授業に影響が出ることが予想される。範囲外から出題することが望ましい場合は、リード文による十分な説明や、図やグラフ、写真などからの読み取りなどの工夫をお願いしたい。

「地学基礎」においては、近年毎年のように日本で起きている豪雨や火山、地震などの自然災害や、地球温暖化をはじめとする地球規模の環境問題など、我々が取り組まなければならない課題が多く含まれている。その課題の解決方法を探るときに、地学的な事物・現象に主体的・積極的に関わり、諸問題を解決する力を身に付けていることが重要であり、その役割を担っているのが地学教育である。

今後とも、単に地学的な知識や思考を必要とする設問だけではなく、日常生活や現代社会の課題とどう向き合っていくかを考えさせる設問によって、これからの未来を担う生徒たちと社会全体に対し質の高いメッセージを発信していただけることを期待したい。

最後に、各方面から寄せられた意見や要望を真摯に受け入れ、内容を詳細に吟味され、熱意をもって問題を作成された問題作成委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して深く敬意を表したい。

地 学

1 前 文

「地学」は、「地学基礎」との関連を図りながら、更に進んだ地学的な方法で自然の事物・現象を取り扱い、観察、実験などを通して地学的に探究する能力と態度を身に付けさせるとともに、地学の基本的な概念や原理・法則の理解を深めさせ、科学的な自然観を育てる科目である。

令和4年度共通テストの本試験の受験者数は487,469人（昨年度より4,387人増）で、この4年間減少が続いていたところから増加に転じた。地学受験者数は1,350人で、昨年度より6人減少し、理科②全受験者数の0.3%であった。理科②の延べ受験者数についても、この4年間減少傾向が続いていたが、今回は「物理」「化学」「生物」の受験者が5,005人増加した。「地学」選択者は2年続いて毎年300人程度減少していたが、今回は昨年とほぼ変わらなかった。

また、平均点は52.72点であり、昨年度より6.07点上昇した。昨年度は「生物」の平均点が72.64点と高く、「物理」と「化学」について得点調整が行われたが、平均点が46.65点と最も低かった「地学」は、受験者が1万人以下であることから得点調整は行われなかった。昨年まで5年続けて平均点が50点以下であったことや得点調整がないことにより、「地学」を選択することに対して疑念が生じないかとの危惧があったが、今回は共通テストとしておおむね適切な問題構成と難易度になっており、学習範囲の幅が広い「地学」の受験者の特性に配慮された作問がなされていた。

評価に当たっては、共通テストの趣旨である「大学への入学志願者を対象に、高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的とし、各教科・科目の特質に応じ、知識・技能のみならず、思考力・判断力・表現力等も重視して評価を行うものとする」に基づき、本年度の「地学」本試験の問題について、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内 容・範 囲

学習指導要領の定める範囲内から教科書に準じた内容で構成され、全分野バランス良く出題されていた。小問別に見ると「地球の概観」に関する設問が4問、「地球の活動と歴史」に関する設問が11問、「地球の大気と海洋」に関する設問が7問、「宇宙の構造」に関する設問が8問とほぼ偏りが無い。教科書によって取扱いに差が見られる題材もあるが、特定の教科書への偏りはなかった。

内容については、基本的な知識の組合せやその正誤判断、探究活動や観察、実験、野外実習や天体観測などを題材として、観察、実験や探究活動についての理解力や思考力・判断力・表現力等を問う問題、図表やグラフを読み取り、数学的処理能力や思考力・判断力・表現力等を問う問題、興味を引く地学のトピックを扱った問題など、共通テストの問題作成方針を踏まえた設問が多くあり、適切であった。昨年は共通テスト第1回として、新傾向の問題など数段階の思考力・判断力・表現力等が必要となる問題の割合が多く、解答に要する時間の不足が課題として挙げられていたが、今回は地学の幅広い領域を確実に学習した受験者が時間内に解答できる適切な構成・分量の作問がなされていた。

以下、個々の設問について意見を述べる。

第1問 20世紀の地学的な発見を題材に、多領域に渡る地学現象について小問で構成した問題である。地学の研究史からの題材設定であり、小問相互の関連性は低いが、水を題材とした昨年度共通テスト(1)の第1問と同様の試みは、地学の幅広い領域を意識させる上で評価すべき形態と言える。

問1 大気圏の鉛直構造とその現象について、基本的な知識に加えて水蒸気量や極渦など、やや詳細な知識も必要とする問題である。

問3 P波の走時曲線からモホ面の深さの違いを問う問題である。グラフの屈折点を読み取り、地殻とマントルのP波速度が異なることから考察する、思考が要求される良問である。

問5 マグマの結晶分化作用に関する基本的な知識・理解を問う問題である。結晶分化作用の過程に関する確実な知識が必要とされる問題である。

第2問 地球の概観や地球の活動に関する題材について、基本的な知識・理解を問うものから高い思考を要するものまで、難易度に差をつけた問題を適切に組み合わせている。近年注目されたチバニアンを取り上げた点は地学への興味関心を高める問題として評価される。

A問1 アイソスタシーが成り立つ地域の重力異常について考察する、難度の高い問題である。フリーエア異常とブーゲー異常をそれぞれ問うているため、重力異常を苦手とする多くの受験者には難しかったと思われる。また、アイソスタシーと二つの重力異常の関係について、「地学」の2社の教科書中、1社は図が掲載されているが、もう1社は本文の記述のみであり、有利不利の影響があったかもしれない。

A問2 地球内部の状態と地震波の伝わり方についての知識・理解を問う標準的な問題であり、かつて「地学I」で類似問題が出題された。2社中1社の教科書はS波の伝わり方の図は無く、本文の記述で説明している。平易なようで図の読み取りに正確さが必要とされる問題である。

B問3 話題となったチバニアンを題材に、地磁気の要素についての知識・理解と思考を要する、良問である。地磁気の向きを空間的に捉える難しさがあり、鉛直分力の向きの変化を誤答した受験者が多かったのではないだろうか。

C問5 火山地形とマグマの性質について基本的な知識を問う問題で、対象の火山は中学校理科や「地学基礎」でも扱う火山であり、平易な問題である。

第3問 地球の歴史について、野外活動や観察、実験などの探究活動を題材として場面設定を工夫した良問が複数あり、共通テストの問題作成方針を踏まえた適切な問題構成であった。例年出題される地質図の読図問題や化石の問題がなかったが、標準的な問題も含め、地学のスケールを感じさせる広い領域の内容を扱った工夫が評価される。

A問1 採取した岩石の観察結果から広域変成岩の種類を問う問題である。基本的な知識があれば、リード文の記述から判断できるが、観察写真を提示することで改めて考察させる工夫がされている。

A問2 広域変成作用が起こる場所と代表的な広域変成帯についての知識・理解を問う問題である。現在のプレートの沈み込みの模式図と、西南日本の変成帯を結び付けて考察する問題は、あまり見られなかった問題であり工夫が見られる。変成帯の名称が不確実な受験者も多かったと思われる。

B問3問4 海洋調査の試料から柱状図を作成する研究活動を取り上げ、古環境の推定に使われる有孔虫の酸素同位体比を題材にした問題である。図解等には詳しい記載があるが、教科書は2社中1社が有孔虫に関連付けた詳しい記載や説明図があるのに対して、もう1社は簡単な記載と結果を示すグラフのみであるため、戸惑った受験者もいたと思われる。問3は、示準化石についての基本的な知識を問う「地学基礎」レベルの問題で平易だが、問4は気候変動と酸素同位対比の因果関係について思考を要する難度の高い問題である。リード文に $H_2^{16}O$ が $H_2^{18}O$ よりも蒸発しやすいことなどの説明を入れるか、あるいは図で仕組みを示すなどすると考えやすくなったのではないかとと思われる。

B問5 周期的に起こる現象について、基本的な知識を問う設問である。選択肢の用語で地学的

なスケールが大きいことが実感できる問題である。

C問6 日本の地質帯と形成年代についての知識を問う問題である。細かな形成年代を知らなくても、リード文を読んで西南日本の付加体が海洋側に向かって新しくなることが分かれば解答できる。問2に続き西南日本の地質を扱った問題であったが、地質図や地質断面図などの標準的な問題があった方がバランスとして良かったのではないか。

第4問 雲の形成と大気安定・不安定についての知識・理解や、グラフを読み取って計算する問題、海洋に関する新規傾向の問題が出題された。全体として難度が高く解答時間を要する問題が多かった。

A問1 露点と凝結高度についての知識・理解を問う良問である。近似式が与えられているため、計算問題ながら解答しやすかったと思われる。近似式の説明についてもう少し簡潔な表現を求めたい。

A問2 大気安定・不安定に関する知識・理解及び思考を要する問題である。条件付き不安定の空気塊の動きを、リード文から読み取って推定するやや難しい問題であった。問1同様リード文を分かりやすくするか、または図の提示により理解を促す方法があってもよいと考える。

A問3 雲の形成についての基本的な知識を問う問題で、選択肢の文に下線を引いて着目部分を示す工夫があり、受験者が視点を整理しやすくなるという点で評価したい良問である。

B問5 海水の密度構造をアイソスタシーの考えから求める目新しい計算問題で、高い思考を要する良問である。見慣れない図であるため、問題文と図を理解するのに時間を要した受験者がいたと思われる。

B問6 海面の高さから地衡流の向きを考察する工夫された問題である。点Aの水圧が点Cよりも低いことから圧力傾度力の向きを捉え、転向力によって海水の流れが反時計回りになることを導くが、立体的に考える難しさがある。また、北半球の地衡流をそのまま当てはめて誤った受験者もいたと考えられる。

第5問 天体観測による探究活動を題材とした問題や、天体現象への興味関心を基にした会話文から推論する問題があり、共通テストの問題作成方針を踏まえた適切な問題構成であった。惑星の視運動を扱った問題は最近ではめずらしく、受験者は戸惑ったと思われるが、改めて地学ならではの観測の重要性や洞察力の必要性を伝える意義のある問題であったと言える。

B問2 天体観測の活動から、惑星の位置についての知識・理解を問う問題である。最大離角の意味を理解していれば平易である。

B問3 火星の視運動と、軌道上の位置関係を問う問題で、視点の移動が必要となるため、思考を要する良問である。惑星の視運動を図示した問題は「地学I」以降出題されておらず、天文が苦手な受験者は戸惑ったものと思われる。惑星の天球上の動きについて、2社の教科書のうち1社は本文で図解しているが、1社は実習での扱いとなっており、実習や天体観測の体験が影響を与えた面もあると考えられる。

C問4 銀河の構造とハッブル分類の種類について基本的な知識を問う問題である。教科書に同じ楕円銀河と不規則銀河の画像が掲載されているが、渦巻銀河に比較して特徴が見つけにくく、受験者には画像による区別が難しかったと考えられる。

C問5 会話文を読み取り、古い恒星の集団である銀河C（楕円銀河）には、寿命の短い恒星が存在しないことを考察する力が求められる適切な問題である。

C問7 超新星の最大光度の絶対等級を太陽との比較から計算する計算問題である。Ia型超新星の最大光度について、教科書の1社は「約-20等級」であること、もう1社は「-19等にも達する」との記載があるが、扱いは大きくはない。天文分野の詳細な内容まで把握し、この値を

思い浮かべた受験者がいたと思われるが、計算による確かめは実施したのではないだろうか。天文領域の興味を引く現象を会話文で取り上げたことは、地学への興味関心を高める意味で意義あることと感じる。

3 分量・程度

大問は5問構成で、小問数は30で構成されており、昨年度に比較して小問数が一つ増加したが、ページ数は34ページから31ページに減少した。図表やグラフを活用する設問は昨年度の12問と同程度の13問であるが、共通テストの問題作成方針に基づく新傾向の図表やグラフの割合は昨年度より減少した。観察、実験や観測に関する設問は3問から4問に増え、計算問題は5問から3問に減少した。昨年度に比較して、基本的な知識を基に思考・考察する設問が増え、思考力・判断力・表現力等を必要とする設問の割合が減少したため、問題数が増加しながらも適切な分量となった。昨年度までの数年間、問題文の読解や思考に時間を要する設問の割合が多く、解答時間が不足する受験者が多いのではないかと指摘が続いてきたが、今回は全体として改善されたのではないかと考えられる。

選択肢数は4択が27問、6択が2問、8択が1問で、昨年度と同様に4択の設問が9割を占めた。各設問の配点については3点または4点で、適切であった。

難易度についてはA（平易）が5問、B（標準）が10問、C（やや難）が15問、D（難問）が0問と分析した。全体として、難度の高い問題と平易な問題がバランス良く組み合わせられ、平均点が46.65点から52.72点に上昇した。昨年までの5年間の平均点は39.51～48.58点であった。

4 表現・形式

全体として、受験者に分かりやすい表現が用いられており、理解しやすい内容であった。図やグラフが多用されているが、受験者にとって見慣れない図やグラフを使った問題、新傾向の問題の割合は昨年度より減少し、設問の理解や読解に要する時間は軽減された。第3問のB問4については、図が表示されると理解しやすかったものと考えられる。

形式については、該当する項目を選択する設問が19問、文章を選択する設問が8問、計算が主体となる設問が3問で、天文分野などは題材により計算問題がもう1問あってもよいかもしれない。正誤の組合せ問題が昨年度の5問から1問に減少したことは平均点の上昇に影響している可能性があると考えられる。

5 まとめ（総括的な評価）

・高等学校の授業改善への影響

今回の共通テストでは、「地学」の教科書に準じた内容から基本事項の知識・理解の習得だけでなく、観察、実験に基づき、文章や図・グラフから情報を読み取り、地学的な思考力・判断力・表現力等を見る問題が出題された。高等学校では、基本事項の知識・理解とともに、観察、実験を行い、基本的な原理・法則を理解させる必要がある。さらに実験の手法の習得や仮設の設定、実験の記録・資料から考察する力などを身に付けさせることも必要である。また学習した内容が、日常生活や社会との関わりを示しながら、自然災害や地球環境の諸問題との関連を考えさせる授業が求められる。

・意見・要望・提案等

上記のように検討した結果を、以下の8項目の視点から次のように要約し、今後の試験問題の作成に対し、提案・要望を行う。

(1) 学習指導要領に基づく「地学」の内容、範囲内から出題されていた。

- (2) 高等学校における学習の達成の程度を見ることについて、一部に教科書での記載が十分ではない設問があったがおおむねふさわしい問題内容であった。
- (3) 教科書に基づく基礎的な知識・理解を重視しつつ、地学的な思考力，判断力・表現力等を問う出題もされていた。
- (4) 出題内容は各分野から満遍なく出題されていた。
- (5) 問題の難易度の程度，設問数，文字数，選択肢数は適切であった。基本的な知識を問う問題と高い思考力・判断力・表現力等を要する難度の高い問題がバランス良く配置され、「地学」を確実に学習した受験者が時間内に解答できる分量と難易度であったと思われる。
- (6) 観察，実験に基づく問題の場面設定がなされており，実際に観察や観測をした経験があり本質的な理解をした受験者には解答しやすいものになっていたと思われる。
- (7) 設問の形式や文章表現・用語，そして配点は適切であった。
- (8) 図やグラフ，写真を効果的に用いた出題があり適切であった。

今回の共通テストで平均点がようやく50点を超え，この数年間の課題であった難易度の適正化がなされたと言える。得点調整がされない制度の下で他科目の平均点との大きな離が続いたことにより，「地学」が受験者や指導者に不利な選択科目である印象を与えてきたことは否めない。今回は，「地学」の幅広い内容を確実に学習した受験者が，時間内に解答できる分量と内容であり，思考力・判断力・表現力等を要する設問と，基礎的事項を確認する設問がバランス良く配置され，問題の形式も含めて適切な難易度となるような工夫がされていた。また，観察，実験，野外実習や天体観測，地学のトピックを扱った問題は，共通テストの問題作成方針にのっとり，探究的な学びを促す役割を果たすと同時に，学習者の興味を喚起する工夫がなされていた。

「地学」が対象とする領域は非常に幅が広く，それぞれの領域が独立した専門分野であるために，受験者は設問ごと思考の切り替えを頻繁にしなければならない場合や，壮大な空間及び時間スケールをもって総合的に判断しなければならない場合がある。このような特性を踏まえ，今後も受験者の側に立った難易度，分量，全体のバランスを考慮し，他教科とのバランスも踏まえて平均点を6割程度にするための問題作成の工夫をお願いしたい。

最後に，高等学校教育現場関係者から提案した意見や要望等を真摯に取り入れ，熱意をもって作問に取り組み，共通テストへの強い意気込みが現れた問題を作成された委員の諸先生方のこれまでの御努力に対して，深く敬意を表したい。